

# 令和5年度全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 広徳 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和5年4月18日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語、算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

#### (1) 教科に関する調査（国語、算数）

##### 教科に関する調査（国語、算数）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

#### (2) 児童質問紙調査

##### 児童質問紙調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

### 3. 教科に関する調査結果の概要

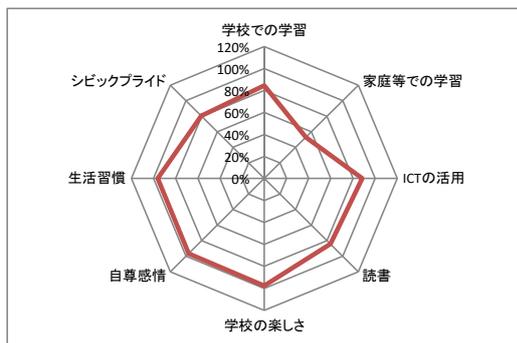
#### (1) 全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

本年度の結果	国語		算数	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	9.4	59
全国	9.4	67	10.0	63

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	「知識及び技能」は、全国平均とほぼ同等であった。 「思考力、判断力、表現力等」は、全国平均を下回っていた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	情報と情報の関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことが概ねできていた。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめるなど、「話すこと・聞くこと」に関する問題が課題であった。	
算数	全体的な傾向や特徴など	「知識・技能」は、全国平均とほぼ同等であった。 「思考・判断・表現」は、全国平均を下回っていた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	図形や表などの意味や性質を理解しているかについての問題は概ねできていた。	
	努力が必要な問題	求め方と答えを式や言葉を用いて記述できるかについての問題には課題があった。	

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> <li>「学校の楽しさ」「自尊感情」「生活習慣」に関する質問に対して約90%の児童が肯定的に回答している。特に「友人関係に満足している」の問いは、全国平均を上回っていた。</li> <li>「家庭等での学習」に関する質問に対しては、学習時間や計画性について大きな課題であることが分かった。今後は学校から家庭学習について改善策等を発信し、自主的・主体的な学びが充実できるようにしていく必要がある。</li> </ul>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組

- ・国語、算数ともに朝学習の取組や自主学習ノートや学力補充の取組など基礎基本の学力定着を続けていく。
- ・算数や理科は、実生活と結び付けたり、具体物を使用したりした学習をより一層取り入れながら、興味関心とともに、算数的思考、理科的思考を高めていく必要がある。

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

- ・家庭学習を自分で計画を立てて学習することができるように、自学ノートやドリルアプリなどを今後も続けていく。
- ・児童の家庭学習の習慣を育てるために、学校と家庭が連携していく必要がある。学校通信や学年通信などで情報共有を行う。
- ・学校行事を充実させたり、自分のよい所を見つけ、伸ばせる学習などをさらに推進したりし、児童の自尊感情を高めていく取組を続けていく必要がある。